



Title	＜書評＞平 浩一著『「文芸復興」の系譜学：志賀直哉から太宰治へ』
Author(s)	西野, 厚志
Citation	太宰治スタディーズ 別冊. 2015, 2, p. 48-50
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102578">https://hdl.handle.net/11094/102578</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 平 浩一 著

## 『文芸復興』の系譜学

## 志賀直哉から太宰治へ』

西 野 厚 志

かつて、〈文芸復興期〉と呼ばれた一時代があった。一九三五年前後の数年間、大家（志賀直哉・宇野浩二・谷崎潤一郎）や中堅（川端康成・井伏鱒二）、さらに新人（高見順・丹羽文雄・石川達三・太宰治）といった世代を異にする文学者達が同時期に活躍した。また、『文学界』『行動』『文芸』などの文芸雑誌や『日本浪漫派』『人民文庫』といった同人誌の創刊が相次ぎ、芥川賞・直木賞が創設された。そして、戦後へと連なる〈純文学／通俗小説（中間小説）〉という問題系を提出した横光利一「純粹小説論」や小林秀雄「私小説論」といった重要な論考が書かれた。かくも豊饒な時代。しかし、既存の文学史はこの時期の持つ意義を不当に矮小化し、〈文学〉の領域へと閉じ込めてきたのではないか。

近年、〈日本近代文学史〉の再検討が進んでいる。〈文芸復興〉

と時を同じくして交わされた日本資本主義論争を背景に小林秀雄と中村光夫による〈私小説の前近代性〉という批評軸の成立を論じた桂秀実『天皇制の〈隠語〉』（二〇一四、航思社）や、本書で〈文芸復興〉の名付け親として言及される林房雄の小説「青年」の改稿過程に講座派的歴史観の変遷を辿った内藤由直『国民文学のストラテジー』（同、双文社出版）、一九三〇年代の論壇の形成を描く大澤聡『批評メディア論』（二〇一五、岩波書店）などがある。そのような中、本書は〈文芸復興期〉を対象として従来の昭和文学史の記述から捨象された事項を拾い集めることで、いまも我々を拘束しているかもしれない認識論的布置の生成過程を浮き彫りにしてゆく。

本書の方法論は、「実証的なアプローチを基軸としながら、章を追うごとに、時代背景から作品へと徐々に視点を絞ってい

く形で論を運ぶ」と簡略に述べられるのみだが、何よりも書名がその手付きを示している。すなわち、〈系譜学〉的手法である。〈系譜学 genealogy〉とは、権力の正統性の根拠となる家系図の真偽を明らかにする学問を指す。そもそも、〈種属 genus〉(ジャンル genre の基となった語)を意味するラテン語とも語源的に響きあうギリシア語の〈出生 genea〉についての〈言葉 logos〉が原義で、物事の発生過程を問う学知のことである。フリードリヒ・ニーチェが哲学的に意義付け、ミシェル・フーコーが言説分析から権力論へと移行するなかで自身の方法論として提唱したことで知られる。「系譜学は、(…)理念的なものであるの意味の超歴史的な展開や無限定な目的論と対立する」(フーコー「ニーチェ、系譜学、歴史」)。その使命は「起つたことをそれに固有の散乱状態のうちに保つこと」、「歴史を反記憶とすること——そしてその結果として、そこでまったく別の形の時間を展開させること」である(同)。単線的な記述を用いる文学史家に、本書の著者は系譜学者として対峙するだろう。周知のように、平野謙は、「封建的な生活感情」(リアリズム)と「資本主義的な生活様式」(モダニズム)、そして「社会主義的な生活志向」(マルキシズム)の並存として昭和初年代の文学状況を描いた『現代日本文学入門』など。いわゆる「三派鼎立」の公式である。そして、一九三四年のナルプ(日本プロレタリア作家同盟)解散を契機にした統一的な「人民戦線」成立の可能性という理念を〈文芸復興期〉の中核に据え、〈昭和文学

史〉という大きな歴史／物語を築き上げた。

対して、著者は研究史を丹念に辿りながら(第一部「文学史の形成と「文芸復興」——平野謙の文学史観を中心とする戦後研究の検証」)、「一九三三(昭和八)年」、「既成作家の復活」、「ジャーナリズム」、「大衆文学」、「新興芸術派」といった、これまで顧みられることのなかった要素を取り上げていく。質的差異を量的差異へと転化させる資本の論理が〈文学〉を包摂し、既成作家の商品的価値が吊り上がる一方(第二部第一章「企図された「文芸復興」——志賀直哉「萬曆赤絵」にみる既成作家の復活」、大衆作家は自殺に等しいような作品の量産へと駆り立てられていった(同第四章「黙殺される「私小説」——直木三十五「私 眞木二十八の話」にみる文学ジャンルの問題」)。また、市場原理の徹底が、多様な顧客の要望に応えるべく雑多な記事を並列させる編集手法を産み出し(同第二章「円本ブーム」後のジャーナリズム戦略——『綜合チャーターナリズム講座』を手がかりに)、同時代の新奇な文化事象をモニタージュするモダニズムの様式を成立させた(第三部第一章「文芸復興」期における「新興芸術派」の系譜——龍胆寺雄から太宰治へ)。そして、皮肉なことに、〈文学〉の商品化は〈文芸復興〉(純文学の再興)による出版資本主義(ジャーナリズム)への抵抗という幻想までも可能にしたのである。こうして、〈権力〉も〈抵抗〉もすべて下部構造に還元されてしまうのか。

しかし、〈系譜学〉の根底には「権力は経済を機能させ、経済

に特徴的で、経済の機能にとつて本質的な諸関係を固め維持し更新するためにあるのか」という経済決定論への批判があったのではなかったか（フーコー『社会は防衛しなければならない』）。問いに対して、本書の終結部（「おわりに——新たな系譜に向けて」）には、微視的な視線のみがとらえることのできる（文学）の潜勢力を示す言葉が記されている。「文学者は自己の従事してゐる文学に於ける偉大なるものの小ささを知らねばならぬ」（高見順「文学非力説」）。さらに、系譜学者の言葉を本書の余白に書きつけておこう。「系譜学は、その「巨石建造物」を築くのに、「有益な大きな誤謬」ではなく「厳密な方法によりうち立てられた、まがいものでない小さな真実」を用いなくてはならない」（フーコー「ニーチエ、系譜学、歴史」）、と。

（二〇一五年三月三日 笠間書院 四二〇〇円）